

日本河川・流域再生ネットワーク <http://www.a-rr.net/jp/>  <https://www.facebook.com/JapanRRN>

「日本河川・流域再生ネットワーク (JRRN)」は、河川再生について共に考え、次の行動へ後押しする未来志向の情報を交換・共有することを通じ、各地域に相応しい河川再生の技術や仕組みづくりの発展に寄与することを目的に活動する団体です。またアジア河川・流域再生ネットワーク(ARRN)の日本窓口として、日本の優れた知見をアジアに向け発信し、海外の素晴らしい取組みを国内に還元する役割を担います。

目次	Pages
➤ JRRN 事務局からのお知らせ	1
➤ 会員寄稿記事	4
➤ 会議・イベント案内 & 書籍等の紹介	12
➤ JRRN 会員募集中	13

JRRN 事務局からのお知らせ (1) JRRN Activity Report

「河川技術が果たすイノベーションと社会貢献」国際シンポジウム提言のご紹介

1. 「河川技術が果たすイノベーションと社会貢献」国際シンポジウムの開催

2015年11月28日に国立京都国際会館にて、「河川技術が果たすイノベーションと社会貢献」国際シンポジウムを開催しました。本シンポジウムの開催報告は、JRRN ニュースレターNo.103 (2016年1月)に掲載しておりますので御覧頂ければ幸いです。

2. シンポジウムの提言

当シンポジウムの最後では、各講演やパネディスカッションを含めたシンポジウムの取りまとめとして、玉井信行先生（「河川技術が果たすイノベーションと社会貢献」実行委員長）より、気候変動下の壊滅的な土砂・水災害などのリスク管理と河川環境の保全の両立を目指した環境災害リスク管理の概念が提言として示されました（右表参照）。

3. おわりに

日本語と英語を併記した本シンポジウムの講演録は、本シンポジウムのウェブサイトにて公開致します。

→ <http://river-innovation.net>

シンポジウムにご参加できなかった皆様にも、是非ご覧頂き、皆様のご意見、ご感想をお寄せいただければ幸いです。

なお、本シンポジウムは世界工学会議 (WECC2015) に合わせて開催し、本シンポジウムの運営にあたっては、公益財団法人河川財団による河川整備基金の助成を受けて開催することができました。

この場をお借りし、世界工学会議開催事務局及び公益財団法人河川財団に御礼申し上げます。

国際シンポジウムの提言

1. 『自然災害』とは何か	自然の大変動のうち、特に人的、社会的に大きな被害が生じたものを『自然災害』と捉える。
2. 被害拡大の要因とは何か	災害の発生原因、トリガーとなる事象、被害の拡大要因等、複数の要因が偶発的に重なることで被害が拡大する。
3. リスク管理へのパラダイムシフト	構造物による防災に加えて、災害情報と避難の高度化など被害の緩和を目標とするリスク管理が行われていかなければならない。
4. 外力レベルとそれに応じた安全対策・管理	災害を引き起こす外力の水準に応じた安全対策・管理が重要となる。自然外力のレベルには限界がないことを念頭に置くべきである。
5. 環境災害の概念の普及	災害による、人間社会への影響（被害）と、自然環境への影響（生物多様性の喪失）に対し対策を講じることが望ましい。
6. 自然災害を議論する上で不可欠な2つの要因	自然災害を議論する上で、地形、気象に関する自然的要素と人為的な要素の2つの観点が不可欠である。
7. 自然災害対策には、上記の2つの要因の理解が重要	自然災害への対応には、地域の地形、気象に関する自然特性の理解と地域の歴史的背景に基づく社会的な背景の理解が重要である。
8. 順応的な管理	自然災害の被害のうち、環境的要素には現在の科学では未だ明らかに知りえない不確実性が多分に含まれていることを認識する必要がある。
9. 自然再生には3つのレベルがある	第1水準は地先での修復、第2水準は、セグメント規模でのエコシステムの機能再生、第3水準は流域規模でのエコシステムの機能再生である。
10. 被害の緩和と環境の保全	自然災害に関する自然的、社会的な要因は、「環境災害の軽減」という目的の下に統合されるべきものであり、関連する多くの専門技術の相乗効果による技術進展と社会システムのイノベーションが不可欠である。

(JRRN 事務局・伊藤将文)

「桜のある水辺風景 2016」 写真とメッセージを募集しています！(5/18〆切)

桜の季節もラストスパート。満開の桜も美しいですが、散りゆく桜、水面に浮かぶ花筏も美しいですね。今年みなさんの印象に残ったのはどんな桜でしょうか。

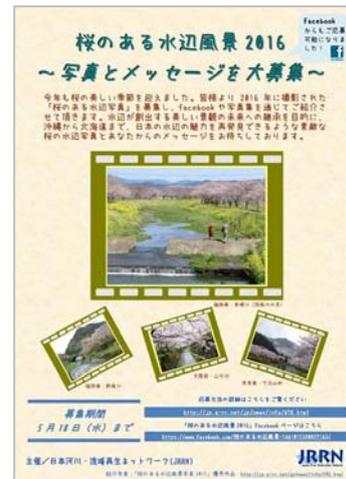
「桜のある水辺風景 2016」、引き続き作品を募集中です。みなさんのカメラやスマートフォンに撮りためた桜の写真残っていませんか？ メールや Facebook でお気軽にご応募ください。【応募〆切:5月18日(水)】

※募集案内ページはこちらから：

<http://jp.a-rr.net/jp/news/info/678.html>

※Facebook での応募方法はこちらから：

<http://jp.a-rr.net/jp/news/info/684.html>



(JRRN 事務局・阿部充)

桜のある水辺風景 2016 Eメール応募要項 応募締切： 2016年5月18日(水)

- テーマ： 「桜のある水辺風景 2016」 ※2016年に撮影された写真に限定させていただきます
- 応募資格： どなたでもご応募いただけます。
- 作品規定： ご本人が撮影したデジタル写真（3MB以内/枚）のみの投稿とさせていただきます。応募はお一人5点まで可能です。なお、個人が特定できる人物画像が含まれる場合は被写体の方の了承を得てください。
- 応募方法： 下記の「応募シート」に、**題名、撮影場所、撮影年月、メッセージ（作品への思い）、氏名、Eメールアドレス**をご記入の上、写真と共に以下応募先へEメールで送付下さい。
※Eメールで複数画像を送付する場合、合計サイズが約3MB以下となるよう複数回に分けて送付願います。
- 応募期間： **2016年3月23日(水)～2016年5月18日(水)**
- 応募作品の取扱いについて：
 - ・ Facebook ページ及び「桜のある水辺風景 2016 応募写真集」の中でご紹介させていただきます。
 - ・ 応募作品を紹介する際には氏名も掲載させていただきます。匿名での紹介を希望される方は、応募シート内「⑦ その他」の欄にその旨をご記載下さい。
 - ・ 同一地点での類似した風景等の作品は事務局により写真集掲載作品を選ばせて頂く場合があります。
 - ・ 応募内容が本企画趣旨に沿わないと判断した場合は紹介を控えさせていただきます。
 - ・ JRRN の刊行物やウェブサイト等で使用させていただきます。
 - ・ 応募作品は返却致しませんのでご了承ください。
- 応募先（問合せ）： 〒104-0033 東京都中央区新川1丁目17番24号（公財）リバーフロント研究所内
日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN) 事務局 担当：阿部・和田 (Eメール: info@a-rr.net)

※個人情報の取扱いについて： 作品使用に関するお問い合わせ時に利用させていただきますが、他の目的での利用はございません。

※「応募シート」ダウンロード：<http://www.a-rr.net/jp/info/letter/docs/Photo2016form.doc>

JRRN 事務局からのお知らせ (3) JRRN Activity Report

小さな自然再生普及プロジェクトー 平成27年度の取組み総括と今年度の活動予定

JRRN では、昨年度、「小さな自然再生」事例集を全国に普及するとともに、本分野の情報交換や交流のコミュニティを構築し、小さな自然再生の仲間と裾野を広げるための普及促進活動を実施しました。

主な取り組みとしましては、「小さな自然再生」現地研修会を、愛知県豊田市の岩本川、滋賀県長浜市・高時川の2箇所で開催し、これらの成果を学会やJRRNホームページ、新たに構築・公開した「水辺の小さな自然再生」ホームページを通じて情報発信しました。事例集については、皆様から好評をいただき、多数の増刷や続編の作成を望む声をいただきました。また、現地研修会の受け入れ先の皆様には、研修会の開催にとどまらず、その後の活動へのご支援もいただき、私どもが目標とするネットワーク活動に対して確かな手ごたえを感じることができました。

「小さな自然再生」事例集編集委員、現地研修会の受け入れ先の皆様をはじめ、本活動へのご支援・ご協力をいただきました皆様、ありがとうございました。

平成27年度の取組み概要

月	取組み概要
4月	「第12回水辺・流域再生にかかわる国際フォーラム(韓国)」における、編集委員による講演
9月	第1回「小さな自然再生」現地研修会(愛知県豊田市・岩本川)開催
	応用生態工学会・自由集会「小さな自然再生が中小河川を救うIV」開催
	「第18回国際河川シンポジウム(オーストラリア)」における、JRRN事務局による講演
10月	第1回「小さな自然再生」現地研修会開催報告公開 http://jp.a-rr.net/jp/activity/publication/120
11月	第2回「小さな自然再生」現地研修会(滋賀県長浜市・高時川)開催
12月	第2回「小さな自然再生」現地研修会開催報告公開 http://jp.a-rr.net/jp/activity/publication/124
2月	「第9回淡海の川づくりフォーラム」における、JRRN事務局による取組み紹介
	自由集会「小さな自然再生が中小河川を救うIV」講演録公開 http://jp.a-rr.net/jp/activity/publication/129
3月	「水辺の小さな自然再生」ホームページ公開 http://www.collabo-river.jp/

今年度も引き続き、(公財)河川財団の河川基金の助成をいただくことができ、「小さな自然再生」の普及促進、人材育成を目的とした、次の取組みを企画しています。

1. 「小さな自然再生」現地研修会の開催
 - 回数： 3回
 - 内容： 座学+現地研修+ワークショップ(河川管理者の協力の下、事例集による基礎講習、現場での専門家による指導、ワークショップによる演習を想定。但し、河川管理者より資材等の協力が得られる場合は現場での施工実習の実施も検討する予定。)
 - 開催地： 小さな自然再生を既に実施している現場 or これから取り組む予定の現場
 - 研修参加者： 行政職員(自治体等の連携先)、民間技術者、研究者、学生、市民団体等

2. 「水辺の小さな自然再生」ホームページを通じた現地研修成果の全国普及

「水辺の小さな自然再生ホームページ」を活用し、現地研修会で得られた知見を整理し、他地域での活用を視野に全国に普及します。

今年度の活動の実施に向け、JRRN事務局では、「小さな自然再生」事例集編集委員会メンバーとともに研修実施先やプログラムなどについて企画調整を進めています。活動の概要が決まり次第、本ニュースレターやJRRN/「水辺の小さな自然再生」ホームページ等を通じて皆様にご案内させていただきますので、引き続きご支援とご協力をよろしくお願い致します。



水辺の小さな自然再生ホームページ (JRRN事務局・後藤)

河川書の探求(87) & (88)

寄稿者：古賀邦雄（古賀河川図書館・JRRN 団体会員）

※古賀河川図書館ホームページ(<http://koga.mymy.jp/>)で連載中の「河川書の探求」最新号（第87号及び第88号）をご寄稿頂きました。両書評ともに、著者ご本人よりご紹介頂いております。



樋渡 彩+法政大学陣内秀信研究室 編

『ヴェネツィアのテリトリーオ-水の都を支える流域の文化』（鹿島出版会・2016）

樋渡 彩 （法政大学大学院デザイン工学研究科）

世界の人々を魅力し続ける水都ヴェネツィア。ラグーナ（干潟）の水の上に生まれ、資源のない島状の土地に建設活動を積み上げ、これほどに華麗な都市を実現できたのは、外の世界との密接な繋がりがあってのことである。

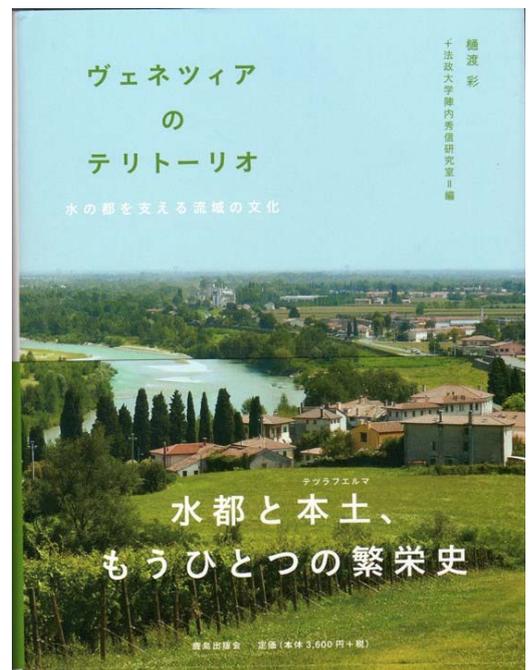
ヴェネツィアの繁栄には、東方貿易で財をなしたと同時に、ヴェネツィアの背後に広がるテトラフェルマ（本土）との関わりが大きかったことはいうまでもない。海洋都市としての華やかさに目が奪われ、従来、東方とのつながりにばかり光が当たるなかで、長らく研究者の関心がおよびにくかったテトラフェルマに、本書は注目する。

水に囲まれながらも飲料水不足に悩まされ、石や木などあらゆる物資の調達を外に依存せざるをえないヴェネツィアにとって、背後に広がるテトラフェルマとの密接な結びつきは重要な命綱だった。とりわけ、ラグーナに注ぐ河川沿いの地域と密接に結びつきながら発展してきたのである。本書は、こうした問題意識に立って、ヴェネツィアを支えてきた後背地である河川沿いの地域に焦点を定めるものである。

河川とその流域を通して、ヴェネツィアを支えてきた後背地の役割を新たな視点から考察し、相互の間に密接で有機的な関係がいかに形成されたかを解明する。ここでは都市の周辺に広がるテリトリーオ（地域）が主役となる。本書は重要な3つの河川を取り上げ、それらの流域とヴェネツィアの関係性を浮かび上がらせることを目的とし、ヴェネツィアの成立と繁栄を支えてきた、川を軸とする水のテリトリーオのあり方を歴史的に描いていく。

本書の構成と各河川の流域について概観しておこう。

第1章では、ヴェネツィアを支えてきたテトラフェルマ（本土）に光を当て、ヴェネツィア周辺地域を広



範囲に論じている。テッラフェルマの歴史的背景、ラグーナに注いでいた河川の付け替えの変遷の歴史、そして、ヴェネトに見られる農家も取り上げている。

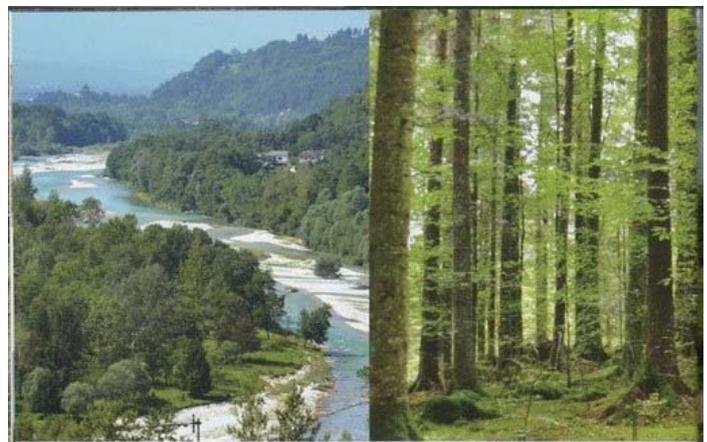
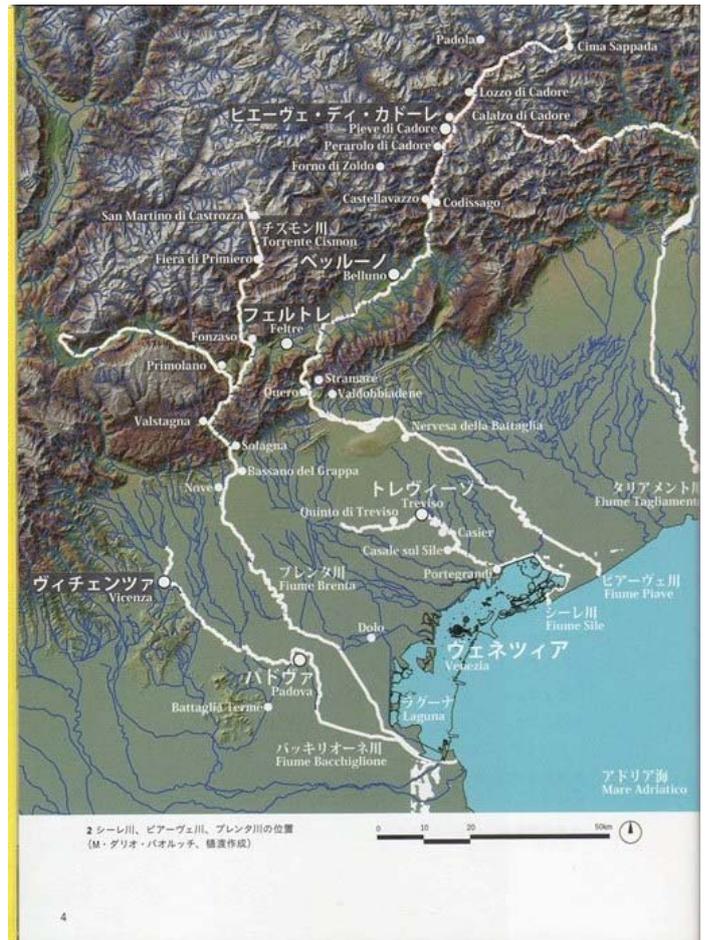
続く第2章では、ヴェネツィアを支えてきたシーレ川流域に関する様々な視点からの考察を試みた。シーレ川は湧水が集まってできた穏やかな流れの河川である。ラグーナに注ぎ、ヴェネツィアとトレヴィーゾ、および北のアルプス方面とを結ぶ重要な河川であった。ヴェネツィア～トレヴィーゾ間で活発な物資輸送が行われ、中継地に川港が形成された。本書には牛が舟を牽引する当時の様子も紹介されている。

また、シーレ川沿いで最も華やかな、ヴェネツィアとは古くから経済・文化交流があったトレヴィーゾを大きく取り上げた。都市のなかを、しかも建物の下まで入り込んで運河がめぐる不思議な空間を、図面化し、水都トレヴィーゾの空間的な特徴を示している。

そしてトレヴィーゾを境に、舟運のない上流側では、シーレ川の水流をそのまま活用した水車を使う産業が発展した。とりわけ製粉の一大拠点となり、ヴェネツィアの人口増加とともに、食糧供給を担ってきた。このように物資輸送の拠点でもあり、食糧供給を支えてきたシーレ川を描いている。

第3章では、木材輸送で知られるピアージェ川流域をとり上げた。カドーレ地域に広がる森からヴェネツィアまでの流れを描くことを試みている。木材はヴェネツィア共和国の存続にとって最も重要な資源だった。建材のほか、海洋都市国家の要である造船用の木材などである。とりわけ国営造船所で使用する木材については、ヴェネツィア政府が森を直管し、ヴェネツィアまで輸送していた。ここでは、伐採、製材所、筏に組む場所などを突き止め、筏師による交代制で筏を運ぶ方法を明らかにしている。それぞれの地域が役割を担い、連携することで木材輸送が成り立っていたのである。

さらにこの筏の上には、木材、石、食料品などあらゆるものが載せられていた。そうした輸送品に注目し、どのような地域からヴェネツィアまで届けられていたのかを明らかにしている。ピアージェ川流域では、こうしたヴェネツィアまでの木材輸送のシステムに焦点をあて、ヴェネツィアがどのような地域と結びつきながら発展を遂げたのかを考察している。



12 ピアージェ川 (積波撮影)

13 ヴェネツィア共和国が所有し、管理していたカンシリーオの森 (積波撮影)



14 製材所と筏による木材輸送 (1608年ごろ)
A.S.Ve, Secreta, Materie miste notabili, reg. 131, cc.22v-23r

最後の第4章ではブレンタ川流域をとり上げる。このブレンタ川を扱うことに、実は本書のひとつの思いがこめられている。これまでの研究では政治的支配にもとづく範囲を扱うことが多く、共和国の領土内のみを描く傾向が強かった。しかし、ブレンタ川流域を軸にすることで、ヴェネツィア共和国の内と外との関係を考察することもできると思われる。

第4章では、ヴェネツィア共和国にとって最も重要な木材にも注目し、共和国の外と内のつながりを描くことを試みた。当時、多量の木材の必要性から、領土の外からも木材を調達していた。その地域のひとつがブレンタ川に注ぐチズモン川流域であった。チズモン川流域で伐採された木材は、丸太のままブレンタ川まで流され、筏に組まれた後、ヴェネツィアまで運ばれた。こうした川を通じたモノと人と情報の流れから、外国との文化交流も育まれたに違いない。ブレンタ川をとり上げ、ヴェネツィアを支えてきた水のテリトリーを明確にすることで、政治的支配圏とは異なる文化・経済圏を描くことが可能となるはずである。

また、ブレンタ川では舟運にも目を向けている。ここでは治水事業を行いつつも、舟運を維持し続けてきたヴェネツィア～パドヴァ間のルートに注目している。さらに政治・経済・文化面で影響の強いパドヴァを大きく取り上げ、運河網の変遷からその歴史を論じている。

このように、本書では新たなテリトリー（地域）論を構築するひとつの手法として、3つの河川をとり上げ、ヴェネツィアとそれぞれの河川流域との間に歴史的に成り立ってきた密接な相互関係を描くことを試みる。本書の記述を通して、華麗なるヴェネツィアの繁栄を足下から支えてきたシーレ川、ピアヴェ川、ブレンタ川とその流域のテリトリーが果たした役割の重要性への理解を深めていただければと思う。そして、ここで試みた水の側から地域を読み解く方法が日本の都市、地域を考えるヒントになることを期待したい。



沖 大幹 著

『水の未来—グローバルリスクと日本』(岩波新書・2016)

沖 大幹 (東京大学生産技術研究所教授)

「地球環境問題の解決には、人類は死んだほうがましか？」

気候変動に関する政府間パネル(IPCC)が1990年に最初の評価報告書を発表し、1992年にはブラジル・リオデジャネイロで国連環境開発会議、いわゆる地球サミットが開催されて、地球環境問題が巷間の話題となり始めた頃、まだ20代だった僕はそんな風に考えたりしていました。

その後、河川水文学の分野からグローバルな水循環と世界の水資源を専門とするようになり、気候変動が水に及ぼす影響評価の研究にも取り組んで、他人事であったIPCCにも係わり、それなりに責任ある立場を経験しました。また、食料輸入が輸入国の水資源需給を緩和できるというバーチャルウォーター(仮想水)貿易の研究をしていた縁で、水利用に関する環境影響評価の指標であるウォーターフットプリント推計手法の国際標準化作業にも日本代表の専門家として係わる経験を得ました。そうした過程では、各国政府や様々な国連機関、あるいはグローバル大企業の活動を垣間見る機会も得て、それぞれの組織や個人が、組織や自分達自身の利益

を追求しつつ公共の利益の増進にも貢献している様子や、政治や組織の論理と科学や技術のせめぎあいを間近に観察・経験できました。

一方で、水分野の専門家として海外の水循環と水資源に関する科学技術外交プロジェクトに携わらせていただいている間に 2011 年のタイ・チャオプラヤ川の大洪水が勃発し、その対応や現地調査、日本国政府による緊急援助のお手伝いをさせていただく機会も得ました。また、様々な国際会議に参加して、各国の水の専門家、あるいは水に限らず気候変動や森林、生態系、食料、健康、エネルギー、さらには防災や環境経済学など、持続可能な開発の実現に不可欠な要素の専門家の方々からいろいろと学ばせていただく機会を得ました。

世界の水問題、地球環境問題を解決するのは人類の幸福の追求のためであり、「死んだほうがましだ」というのは間違いである、という点についてはすでに『水危機 ほんとうの話』(新潮選書、2012年)に書きました。しかし、そうはいうものの、人口はまだ増えるし、気候は変動するし、化石燃料や鉱物資源など再生不可能な資源はいずれ枯渇するだろうから、水は循環資源であるにしても、人類全体としては危機的な状況が迫っているのではないか、という見方に対して、ではどうすればよいのか、どう考えればよいのか、という答えは必ずしも用意していませんでした。

そこで、水を軸としつつも水分野に収まらない地球環境の保全と持続可能な開発に向けた取り組みに関して、これまでの経験と研究に基づいて書き記したのが 2016 年 3 月に刊行された『水の未来—グローバルリスクと日本』(岩波新書)です。

水問題に対して、もう少し市民、企業、政府が注意を払ってくれるようになって欲しい、というのが本書を執筆した大きな理由のひとつでした。日本では自然災害というどうしても地震関連にばかり目がいくところ、日本でも内在的には水リスクが存在し、一旦生じるとそれなりの被害が想定される点、ダボス会議で有名な世界経済フォーラムのグローバルリスク報告書に見られるように、世界では水リスクの顕在化が非常に懸念されている点などをぜひもっと知ってほしいと思ったのです。実際、2011年のタイの洪水の際には、日系の損害保険会社からの日系企業に対する保険金支払い金額は約 9000 億円に上ったそうです。これに対し、同じ年の東日本大震災に対する企業向け地震保険支払いは約 6000 億円(その他に家計向け地震保険 9700 億円と共済組合から 9000 億円)で、国内の大災害よりも海外の災害の方が実は深刻な経済被害をもたらしたのです。

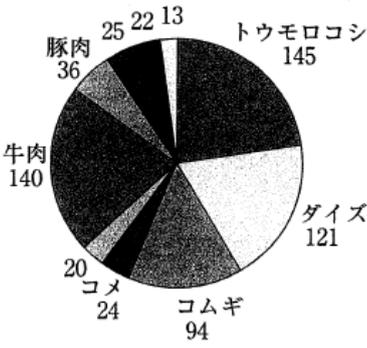
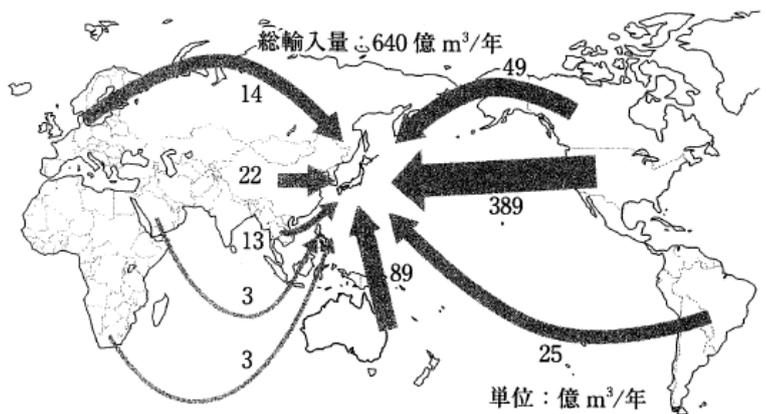
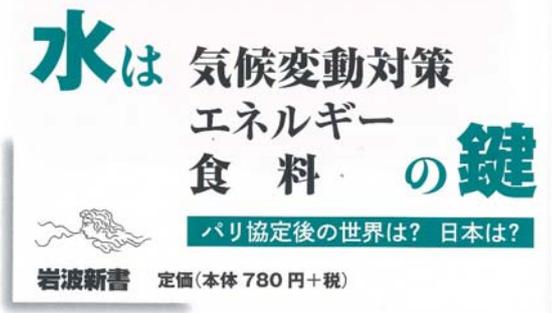


図2 日本の仮想水輸入量と品目別内訳
日本の単位収量および2000年度食糧需給表の統計値より、主要な穀物や肉類などの輸入について算出。佐藤(2003)より。

また、水は循環する資源なのになぜ枯渇したりするのか、水問題は節水すれば解決されるのか、なぜ洪水被害は減らないのか、といった点に関する専門家の常識が一般には共有されていないように思いましたので、その点に関しましても書き込んでいます。

逆に、水や気候変動だけが問題なのではなくて、資源、食料、エネルギー、感染症、自然災害、大規模事故、世界同時不況、国際紛争やテロ、核戦争など、さまざまなグローバルリスクに我々は囲まれていて、それらを上手に管理する必要があるのだ、という点についても議論しています。「人は死なないためだけに生きているわけではない」という文言が登場しますが、これには「安全で快適、健康で文化的な生活のためには多少のリスクを許容せざるを得ない」という意味と、「死ななければ良いわけではなく、より良い生活が送れるように水、食料、エネルギーなどを確保する必要がある」という2つの意味を込めています。

また、なぜグローバル化した大企業が環境問題に熱心に取り組むようになってきているのかについて、単に規制や倫理的な話ではなく、本業として取り組む方が自分達の利益になるからではないか、という点についても指摘しています。そして、持続可能性という概念は環境分野で使われ始めましたが、持続可能な開発目標の達成、人類の究極の目標に近づくためには、社会と経済と環境というトリプルボトムラインで持続可能性の構築を考える必要がある点にも言及しました。「弱い持続性」についても紹介しています。

そういう意味では、気候変動の科学的側面と社会的側面に関してもその歴史的経緯を俯瞰し、今後の気候変動対策が、エネルギーの持続性の構築、社会の強靭さの増進といった側面からも好ましい点についてもご紹介しています。水に関連して、世界の食料需給がどういう風に推移してきたのか、今後何に注意する必要があるのかについても言及しました。

その他にぜひともお伝えしたかったメッセージには、悲観論と楽観論の適度なバランスが大事だ、という点があります。悲観し過ぎても楽観し過ぎても危険を回避する努力をしなくなるとしては大きなリスクを抱えることとなります。グローバルリスクの多くはいずれもなんとか管理可能だと考えて対応し、対策を講じるのが良いのではないのでしょうか。もちろん、技術楽観主義の問題、我々自身が危機感は大好きだけれど行動に移すのはおっくうだ、という点にも触れています。

本書を通じて、少しでも多くの方が水と地球環境の未来に希望を持ち、グローバルリスクを上手に管理しながら社会と経済と環境の持続可能性の構築に向けて取り組んでいただけるようになりますように、と願っています。

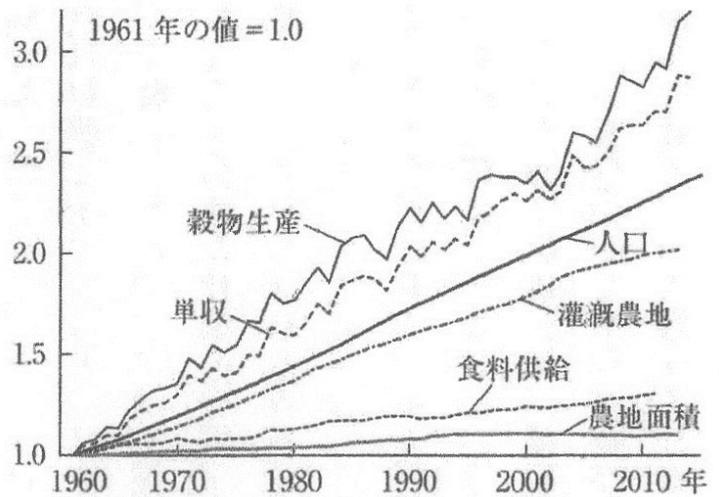


図4 1961年を1とした人口、農地面積、穀物収穫量などの全世界の推移
国連農業食糧機関のデータに基づいて作成。

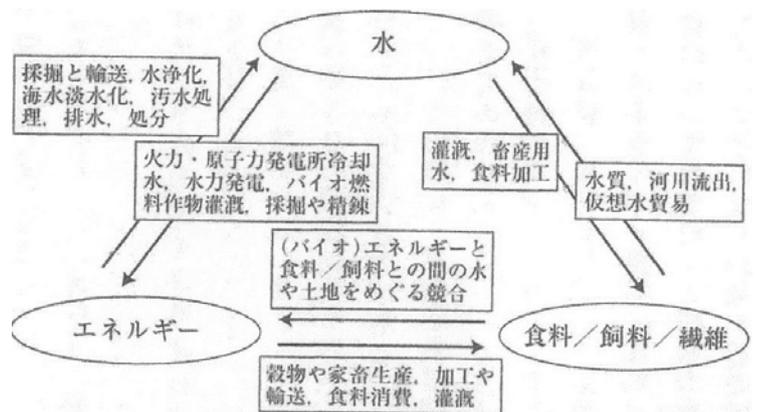


図5 水・エネルギー・食料/飼料/繊維のネクサス(連関)



天竜川ライン下り

(FindTravel 天竜峡観光より)



天竜川

(溪一郎の鮎河川案内より)



あの日のあの川 リレー日記 ～第16話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第16話主人公 渡邊麻里乃

(筑波大学大学院 システム情報学研究科 構造エネルギー工学専攻 白川(直)研究室『川と人』ゼミ)

(■川ガール・□川系男子)

(出身地を流れる川：茨城県桜川)

「幼き日の川の思い出」

いつのこと？：小学生時代

どこの川？：天竜川，矢作川

「あの日のあの川」

ここでは皆、幼少期や青春時代の川での思い出を書き連ねているようだが、私は中学生になった頃からどんどんインドア派になっていったので、青春時代の川での記憶というのはないに等しい。なので、最近思い出すことなどもっぱらなくなった中学生以前の記憶を引っ張りだしてみようと思う。

私は5人兄弟の4番目で、兄が二人、姉が一人、弟が一人いる。私たち兄妹は、小学生時代、春休みや夏休みなどの長期休暇に入るとそのほとんどを祖父母の家で過ごしていた。

母の実家は長野県飯田市の山の上であり、周りを自然に囲まれた空気の美味しい場所である。母は4人姉弟の長女で私には従兄弟が9人いる。私たち兄妹を合わせると祖父母には14人の孫がいることになり、お盆やお正月などいつもとても賑やかだった。祖父母は毎年私たちを色々なところへ連れて行ってくれた。

長野県では蜂の子の佃煮が有名なのだが、それを家で作るために、蜂の子を取ってくるというのも毎夏の恒例行事だった。祖父の運転するバンに乗り込み、わくわくしながら山の中に入っていく。いくつかの木に蜜を塗り、ミツバチが来るのを待つ。そして蜜に誘われてやってきたミツバチに目印となる綿を付けて、巣に帰っていくのを追いかけるのだ。もちろんどこに巣があるかなど検討もつかないので、ただがむしゃらに祖父と従兄弟たちと一匹のミツバチを追いかけて、山の中を走り回ってようやく巣に辿り着くのである。蜂採りは毎年の

ように行っていたが、採ってきた蜂の子の佃煮は今まで一度も食べたことがない。(見た目が結構気持ち悪いので無理だった…)

他にも、祖父の家から少し上がったところにある公園や学校の校庭みたいなところでよく遊んでいた。夏は虫捕りをしたり冬はかまくらを作ったり、雪が積もっている時はみんなでソリに乗って遊んだりもした。

とまあ、ここまで全然川とは関係のない話をしてしまったが、もちろん祖父母は山以外のところにも連れていってくれた。その一つが天竜川である。

ある夏、祖父母、従兄弟たち、両親たち、親戚みんなで天竜川の名もない小さな支流に遊びに行った。その日はとても天気が良く水面がきらきらと光っていたのを覚えている。大きな岩の上から飛び込んだり、泳ぎまわったりとても楽しかった。ひとしきり遊んだ後、川原でバーベキューをしたのだが川で存分に遊んだ後のお肉は格別だった。

また、天竜川ライン下りにも行った。舟に乗って天竜川沿いの壮大な自然を眺めながら水しぶきを浴び、天竜川の、自然の持つ迫りに圧倒された。天竜川ライン下りは本当に素晴らしく、もう一度行ってみたいと思っており、ここ数年行く機会を伺っている状態だ。

一方、父の実家は愛知県岡崎市にあり、矢作川に歩いて行ける場所にある。母曰く、矢作川にも毎年遊びに行っていたらしい。(小さい頃のことなのであまり覚えていない…) 兄妹みんなで浅瀬で泳いだり、砂のお城を作ったり、日が暮れるまで遊んでいた。また、最近になって矢作川沿いを母や姉と一緒にランニングし、小さい頃とは違った気持ちで矢作川を楽しむことができた。

今回、こうして川の思い出について書く機会を与えてもらい思い返してみると、意外に川の思い出があることが分かった。せっかく河川の研究室に入ったので、大人になってからの川の思い出も、どんどん作っていきたいと思う。そして自分が住んでいる場所の身近な川についてもっと詳しく知りたいと感じた。



天竜川



矢作川

(次は肥田野美琴さんにバトンを託します)

水辺からのメッセージ No.84

岡村幸二 (JRRN 会員)

大丸親水公園：

用水 300 年の歴史を継承し今も変わらぬ用水の風景



撮影：2016年4月（東京都稲城市・大丸親水公園）

◆「光と清流と緑の小径」

“大丸親水公園”内の流れる大丸用水は、江戸時代元禄年間に多摩川の水を引いた延長 10km にまで及ぶ農業用水で、その後 300 年にわたり稲城の農耕地を潤してきました。現在は大丸親水公園として桜並木や菜の花の咲き誇る水と緑のネットワークとなっています。

◆用水の歴史を伝える文化財に

JR 南武線の北側はかつて多摩川の河川敷でもあった砂礫低地で、梨栽培なども盛んです。水を制御するために、「伏越」や「掛樋（かけい）」などの水を取り入れる技術が使われています。

 JRRN 会員皆様からの寄稿記事を募集しています！

旅先で見かけた水辺の風景や思い、水辺再生に関わる様々な活動報告、また河川環境再生に役立つ技術等、JRRN 団体・個人会員皆様からの寄稿記事をお待ちしています。（JRRN 事務局）

会議・イベント案内 (2016年5月以降) *Event Information*

(国内の河川・流域再生に関する主なイベント)

■ 入間川・越辺川－改修された魚道のアユ遡上効果調査

○日時：2016年5月1日(日) 9:00～12:00頃

○主催：NPO 法人荒川流域ネットワーク

○場所：菅間堰下流(埼玉県比企郡)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2366.html>

■ 土木学会水工学委員会環境水理部会研究集会 2016

○日時：2016年5月19日(木)～5月20日(金)

○主催：土木学会水工学委員会環境水理部会

○場所：高松市生涯学習センター(香川県高松市)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2364.html>

■ 2016年度河川技術に関するシンポジウム

○日時：2016年6月2日(木)～3日(金)

○主催：公益財団法人 土木学会

○場所：東京大学農学部 弥生講堂(東京都文京区)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2291.html>

■ 応用生態工学会 第20回全国大会

○日時：2016年9月2日(金)～4日(日)

○主催：応用生態工学会

○場所：東京大学本郷キャンパス(東京都文京区)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2368.html>

■ 第16回川に学ぶ体験活動全国大会 in 琵琶湖・淀川流域圏

○日時：2016年9月3日(土)～4日(日)

○主催：第16回川に学ぶ体験活動全国大会実行委員会

○場所：摂南大学 寝屋川キャンパス(大阪府寝屋川市)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2351.html>

■ 第9回いい川・いい川づくりワークショップ

○日時：2016年9月10日(土)～11日(日)

○主催：いい川・いい川づくり実行委員会

○場所：高梁市文化交流館(岡山県高梁市)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2370.html>

(海外の河川・流域再生に関する主なイベント)

- 2016.6.5-9(京都)International Conference on Water Resources and Environment Research
- 2016.6.28-7.1(リヨン/フランス) 9th International Conference NOVATECH
- 2016.8.21-26(仁川/韓国)12th International Conference on Hydroinformatics
- 2016.8.29-31(コロンボ/スリランカ) 20th Congress of IAHR Asia Pacific Division
- 2016.9.12-14(ニューデリー/インド) 19th International Riversymposium
- 2016.9.19-22(Stuttgart/ドイツ) 13th Int. Symposium on River Sedimentation

書籍等の紹介 *Publications*

■ できることからはじめよう 水辺の小さな自然再生事例集 (2015.3 発刊)

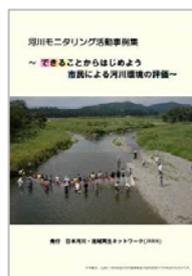
- ・監修：玉井信行 東京大学名誉教授 / JRRN 顧問
- ・編集：「小さな自然再生」事例集編集委員会
- ・デザイン：本間由佳 鶴川女子短期大学
- ・発行：日本河川・流域再生ネットワーク (JRRN)
- ・出版年月：2015年3月



市民が河川管理者と連携して日曜大工的に取り組む「小さな自然再生」の事例集です。小さな自然再生の専門家の方々、専門知識の社会への橋渡しの専門家、そして有志の若手研究者や実務者で協働制作しました。

■ 河川モニタリング活動事例集～できることからはじめよう 市民による河川環境の評価～ (2014.3 発刊)

- ・監修：白川直樹 筑波大学准教授 (JRRN 理事)
- ・執筆協力：河川再生に携わる市民団体や行政機関
- ・編集：JRRN 事務局、筑波大学白川(直)研究室
- ・発行：日本河川・流域再生ネットワーク (JRRN)
- ・出版年月：2014年3月



市民が主体的に取り組む河川環境のモニタリング活動の実態を調べ、各地のモニタリング活動事例や市民による河川モニタリング活動の更なる活性化に向けたヒントを紹介しています。

■ 上記冊子の「印刷製本版」入手方法 ※PDF版はこちらから：<http://jp.a-rr.net/jp/activity/publication/>
JRRN事務局までご連絡ください。送料のみご負担頂いた上で、無料で提供致します。(JRRN 会員限定)

JRRN 会員募集中 JRRN membership

■ JRRN の登録資格 (団体・個人)

JRRN への登録は、団体・個人を問わず無料です。市民団体、行政機関、民間企業、研究者、個人等、所属団体や機関を問わず、河川再生に携わる皆様のご参加を歓迎いたします。

■ 会員の特典

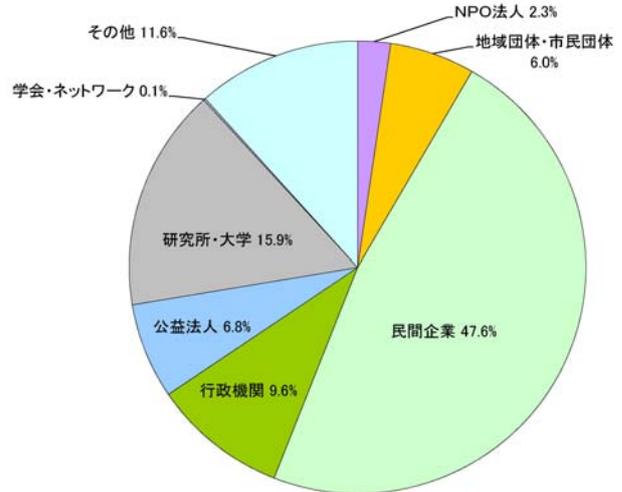
会員登録をされた方々へ、様々な「会員の特典」をご用意しています。

- (1) 国内外の河川再生に関するニュースを集約した「JRRN ニュースメール」が週1回メール配信されます。
- (2) 国内外のセミナー、ワークショップ等の開催情報が入手できます。また JRRN 主催行事に優先的に参加することが出来ます。
- (3) 必要に応じた国内外の河川再生事例等の情報収集の支援を受けられます。
- (4) JRRN を通じて、河川再生に関する技術情報やイベント開催案内等を国内外に発信できます。
- (5) 韓国、中国をはじめとする、ARRN 加盟国内の河川再生関連ネットワークと人的交流の橋渡しの支援を受けられます。

■ 会員登録方法

詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.a-rr.net/jp/member/registration.html>



2016年4月30日時点の個人会員の所属構成
(個人会員数：733名、団体会員数：60団体)

※4月の新規入会数：個人会員2、団体会員0

JRRN 会員特典一覧表 (団体会員・個人会員)

提供サービス	JRRN 個人会員	JRRN 団体会員	非会員 (一般)
1 ホームページへのアクセス及び記事へのコメント入力 ※1	◎	◎	◎
2 ホームページ「イベント情報」欄でのイベント掲載 ※2	◎	◎	◎
3 ニュースメール(週1回)の配信 ※3	◎	◎	×
4 Newsletter(毎月)及び年次報告書(年1回)等の発刊案内メールの配信 ※3	◎	◎	×
5 JRRN/ARRN主催行事の優先案内・優先参加 ※4	◎	◎	×
6 国内外の河川再生関連情報・技術収集や専門家・組織紹介の支援 ※5	◎	◎	×
7 ホームページ「会員からのお知らせ」内及びニュースメール「会員からのご案内」欄で団体が関わる行事・出版物・製品等の案内の掲載 ※6	△※7	◎	×
8 ホームページ「会員登録状況」「国内団体」内及び年次報告書内で団体名の掲載	×	◎	×
9 ARRN活動に関連する英語ニュース(ARRN Newsletter等)の不定期配信 ※8	×	◎	×
10 JRRN及びARRNが保有する国内外専門家・団体等との連携等の支援 ※9	×	◎	×

会員特典詳細はウェブサイト参照：<http://www.a-rr.net/jp/member/benefit.html>

【お気軽にお問い合わせください】

日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN) 事務局



〒104-0033 東京都中央区新川1丁目17番24号 新川中央ビル7階 (公財)リバーフロント研究所 内
Tel:03-6228-3862 Fax:03-3523-0640 E-mail: info@a-rr.net
URL: <http://www.a-rr.net/jp/> Facebook: <https://www.facebook.com/JapanRRN>

JRRN 事務局は、「アジアにおける河川再生のためのネットワーク構築と活用に関する研究」の一環として、公益財団法人リバーフロント研究所と株式会社建設技術研究所国土文化研究所が公益を目的に運営を担っています。

